

書写力向上をめざして

—基礎・基本とその応用—【第20回】

「書写の要素」について ⑬ 〈字形③〉

山梨大学大学院教育学研究科教授 宮澤 鷲州

今月号は、字形を整える要素の一つである「点画の長短」を取り上げます。字形を決定づけるだけでなく、文字の正誤にも関わる重要な要素です。



字形の整え方(二)

点画の長短

字形を整える上で、点画相互の長さの関係(点画の長短)があります。このことは、読みやすい整った形を書くためのみならず、文字が本来持っている固有の形、すなわち、多くの人々が共有し

て認識している字形を決定づける重要な要素です。また、「土・土」「末・末」のように点画の長さによって文字が異なる場合もあり、字形だけでなく字体の正誤にも関わるので、注意が必要です。

なお、本稿では、「点画の長短」の名称で書写の要素としていますが、そもそも「点」に長短はあるのか、といった疑問も生じます。これについては、「黒・魚・馬」にある「れっか(灬)」など、漢字を構成する要素である「点画」の「点」は短い画という考え方で捉えています。



さて、次の「青春」の文字を見てください。どのように見えるでしょうか。

青春

右に示した「青」は、三本の横画がほとんど同じ長さになっています。全体的にずんどうで何か

物足りなさを感じさせ、お世辞にもスマートな字形とは言えません。「青」の場合は、四画目の横画を長く強調すると、字形に「めりはり」が生じて安定感が増します。

そもそも「めりはり」とは、本来、邦楽用語で、音声をゆるめることと張り上げること、または音の高低を指す言葉です。低い音を「減(めり)」、高い音を「上り・甲(かり)」と言い、後に「かり」が「はり」に変化して「減り張り(めりはり)」となり、現在では音以外にも比喩的に用いられるようになりました。

この「青」は、横画がほぼ等しく、「めり」ばかりになってしまい、精彩を欠きます。そこで四画目を長くすることで「はり」をもたせ、「めりはり」が生じ、格好のよい字形、すなわち整い度がアップするというわけです。

「春」はどうでしょうか。三画目の横画が長く、さらに左右の払いもクンと伸びて両者の幅がほぼ同じ長さになっています。あたかも主役の座を競い合っているかのように見えます。また、両者が長いために重心が下がり、文字全体が重く感じられます。つまり、「青」とは対照的に「はり」が多く、うるささを感じさせているのです。

この場合は、三画目の横画は遠慮して短くし(めり)、左右の払いを最大幅にすること(はり)で字形を整えることができます。

「めり」は内への閉鎖・凝縮・緊張の力、「はり」は外への解放・拡散・弛緩の力とも捉えることができます。一画だけ長くしたり、一對の左右の払いを強調することで字形に内外へと向かう力を与えようとしているようにも見えます。両者の力が拮抗したとき、絶妙な均衡が生まれ、字形に生命が宿り、精彩が生じるのだと考えてもよいでしょう。

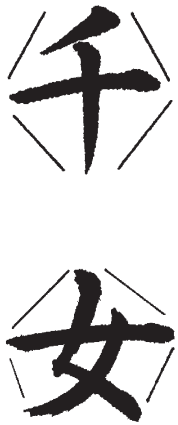
このように「点画の長短」は、図形的な要素でありながら、実は文字に内在する力を引き出す重要な要素であると言えるでしょう。

① 一画強調

「青」のように一画を長く書くことを「一画強調」と呼ぶことがあります。

・横画が一画の場合

文字の横画が一つであっても強調される漢字に「千・女・母・古」などがあります。強調するというより、当たり前のような気もしますが、意外に短く書かれているようなので注意が必要です。



・横画が複数ある場合
横画が複数並ぶ「王・生・里・牛・羊」などは、最下部の横画を強調して長く書きます。



横画がさらに多くなる場合は、上部の横画を長く書くことが多いようです。「書・重・量」などがこれに相当します。「書」の場合、字源として一〜三画目の形が「又(右手)」であることから、二画目が必然的に長くなるのですが、筆順を誤って縦画を四画目に書くと最下部に位置する横画を長く書くケースが多くなるようです。筆順の誤りが画の長さを混乱させることになりかねないので注意が必要です。



・文字の構造上、上下に分離できる場合

「寺・赤・青・黄・幸」などのように、構造上、上下に分離できる場合は、上の部分の最後の横画を長く強調します。



・左右の払いの場合

「大・走・春・夏」のように、左右の払いが一对ある場合は、横画に優先して最大幅をとりまします。



ここで注意したいのは、左右の払いであっても、

最大幅にするかどうかわかりにくいやっかいな漢

字が存在することです。例えば、「美」です。下

部の「大」が押しつぶされて左右の払いが狭い空

間に窮屈に書かれることに加え、構造上「大」の

横画を長く書くことから両者が横幅を長くするこ

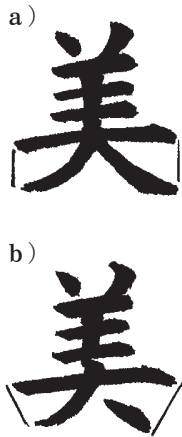
とになってしまふのです（a）。これを解消する

ためには、右払いを短く点にすれば横画に最大幅

を譲ることになります（b）。この書き方は「許

容」になっているので、中学生以上になったらこ

の書き方を推奨したいと思います。



・左払いと曲がりの場合

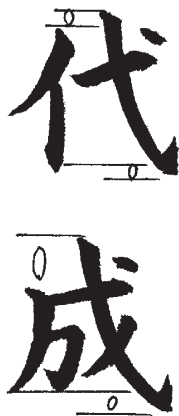
「先・元・光」などのように、左払いと曲がりが一対になった場合、左右の払いが最大幅となるのと同様に捉えます。したがって、すぐ上にある横画は遠慮がちに短く書きます。



③その他の点画の長短

・反りの強調

「代・成・式」などのように、左回転の反りは他の画に対して上下に長く強調されます。この反りは筆順の最後の方に書かれるので、それを見越して前半部分を小さめに書くことが要求されます。



・縦画が複数ある場合

「一画強調」は縦画にも見られます。「川・州・山・出」などの場合です。「川・州」の場合は、右側の縦画を長くして強調し、「山・出」の場合は中心の縦画を強調します。



②一対強調

「春」のように、一対となる左右の払いが最大幅をとる場合、これを「一対強調」と呼ぶことができます。

・曲がりの強調

「色・也・毛」などのように、左払いを伴わない曲がりであっても右方向への張り出しは強調されます。

色也

行形

・複数の左払いの場合

「行・形・参」などのように、左払いが上下に複数並んだ場合、徐々に長くします。

・点が複数の場合(れっか)

「黒・魚・鳥」など、点が複数並んだ場合、左右の点を長めにし、内部の点を短めにします。前述したように、点が短い画という性格を持っている以上、複数並んだ場合は相対的長さの違いを出したほうがよいのです。

特に、「れっか(っ)」は最下部に位置づけられることが多いことから、同じ長さ・大きさで書くと軽快感が失せて重くなり、精彩を欠くことになります。

「天」・「無」の横画はどれが長い？

「天」の横画はどちらが長いのでしょうか。小学校では、教科書体にならって一画目を長くしたAの字形を学びます。しかし、「天」は人(大の形)の頭部に「●または短い横画」をつけた形で、「人の頭の上」「おおぞら」の意味であることから古来、一画目を短く二画目を長くするBの字形で書き継がれてきました。したがって、二画目を長くする書き方も誤りではなく、いわゆる許容の範囲となっています。書道における作品などでは、書の古典にならってBの字

A
天

B
天

形で書くことが求められます。

「無」の三つある横画はどれを長く書いたらいでしょうか。小学校では二番目の横画を長くするAの字形を学びますが、書の古典では三番目の横画を長くするBの字形で書かれ、これも許容の書き方として正解とされます。しかし、AとBでは筆順が異なります。図で示したようにAは三画目の後に四つの縦画を書きますが、Bは三つの横画を書き終えてから縦画を書きます。注意が必要な書き方です。

A
無

B
無

「両字とも戦後の「当用漢字表」が制定(昭和21年)された後に変化したので、Aの形は歴史の浅い書き方と言えます。

魚鳥

以上、「点画の長短」についてのポイントをいくつか挙げてみました。字形を整える上できわめて重要ですから、多くの字例によって習得したいものです。ただ、「点画の長短」は図形的な捉え方だけではなく、「書く」という動作の中で生じる違いでもあることに着目しなければなりません。今回は、「書く」動作から生まれる「点画の長短」について述べます。